

研究分野のキーワード：地理学，歴史地理学，地誌学

#### 研究紹介

私の研究の一つは、地理学の一分野である歴史地理学です。歴史地理学とは、過去の歴史的地域や過去の地理的事象を研究対象とする地理学です。私がこれまでに行ってきた専門的研究は「近世日本の綿作に関する歴史地理学的研究」です。綿は現在の日本ではほとんど見ることはできませんが、江戸時代には、大衆衣料として木綿が普及し、その原料として綿は東海から西日本の諸地域にかけて広く栽培されていました。木綿はそれまでの庶民の衣料であった麻織物に比べて、保温性に優れ染色にも好都合だったため、全国に普及しました。江戸時代の綿の産地としては、東から関東地域、東海地域、江戸時代においては最も先進的な栽培技術を確立していた大阪を中心とする畿内地域、気候が温暖で雨の少ない瀬戸内海地域などがありました。私は、尾張、三河を中心とする東海綿作地域の特色を、先進的な綿作地帯である畿内地域(大阪平野や奈良盆地)の綿作と比較しながら研究してきました。その結論の一つは、東海地域の綿作は、畿内地域に比べて生産性は劣るものの、沖積平野部に点在する自然堤防上の畑地での綿作を中心に行い、幕末に至っても重要な商品作物として存在していたことが特色です。特に矢作川の沖積平野は、花崗岩が風化した砂質土壌が広く分布し、気候的にも温暖で雨が少ないことなど、綿の栽培に適していました。幕末の記録では、本来は畑作物である綿を水田に作付けするような状況も見られたようです。このように当地域の農民は、綿を栽培しそれを売ったり、さらに加工して木綿を織り生計を立てていました。綿は当地域を代表する商品作物でした。ただ綿は、天候に左右されることが多く、秋の台風、長雨や低温によって収穫量が激減することも珍しくありませんでした。また綿は干鰯のような金肥の投入状況によって収量も大きく影響されました。このような綿の収量の不安定さは、上層農家の経営でも起こっておりましたので、一般の農民は天候の影響をより大きく受けたことでしょう。過去の地理的事象や地域を復原することを通して、現在の地域がどのように形成されてきたのかを考えることも歴史地理学の一部でもあります。私の研究で意識したのは、綿作の方法や技術水準がその地域においてどのようであったかを考察することです。綿作の状況を示す史料は散在的に残っておりますので、それらを地図上に落とし面的につなぎ合わせることによって、綿作地域としての特徴をとらえようと努めてきました。